

定時制高校におけるキャリア・カウンセリングの在り方

についての一考察

— 事例研究を通して —

専門研究員 福本啓介（川崎市立高津高等学校）

I 主題設定の理由

1 研究の背景と目的

現在、定時制高校には、過去に何らかの理由で高校教育を受けられなかった生徒（青年期、成人期のみならず、老年期の生徒も含む）、日本語を母国語としない生徒をはじめ、中学校在籍時不登校だった生徒等、実に様々な生徒が在籍している。また、文部科学省の調査¹では、定時制高校に在籍している特別な教育支援の必要な生徒は、全日制の1.8%に対して14.1%であるという数字がある。

定時制高校に在籍する生徒が自らの力で自分自身の将来を見つめ、社会的・職業的自立を図ろうとする際、多くの困難が伴うものと思われる。定時制高校の教員をしていると、就職・進学に限らず自分自身の将来に対する様々な不安の声を多くの生徒から聞く。

文部科学省のキャリア教育の推進に関する報告書²によれば、キャリア・カウンセリングについて「学校におけるキャリア・カウンセリングは、子どもたち一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別又はグループ別に行う指導・援助である。キャリア発達を支援するためには、個別の指導・援助を適切に行うことが大切であり、特に、中学校・高等学校の段階では、一人一人に対するきめ細かな指導・援助を行うキャリア・カウンセリングの充実が極めて重要である」とある。

キャリアについては、中央教育審議会答申³の中で「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、キャリアの意味するところである」とあり、キャリア発達については、同答申の中で「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程をキャリア発達という」とある。

定時制高校に在籍するキャリア発達に課題を抱えていると思われる生徒は、社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現していく過程において、多くの困難を有しているといった現状が見られる。

キャリア発達に課題を抱えている生徒たちの将来に対する不安を少しでも解消し、生徒たちの将来を希望に満ちたものにするためには、キャリア・カウンセリングは必要不可欠である。また、その在り方を考えることは喫緊の課題である。以上のことから、定時制高校におけるキャリア・カウンセリングの在り方について考察することを研究の主題とした。

¹ 「高等学校ワーキング・グループ報告」（『高等学校における特別支援教育の推進について』2011年 文部科学省）

² 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（2004年 文部科学省）

³ 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（『中央教育審議会答申』2011年 文部科学省）

II 研究の内容

1 研究の方法

Aさんの事例について

本研究では、定時制高校における効果的な「キャリア・カウンセリングの在り方」を明らかにするために、事例研究を行うこととした。キャリア・カウンセリングの方法やアプローチ法には、理論的背景によって様々な方法があるが、本事例は『個別の指導・援助の観点から、傾聴を中心とした来談者中心カウンセリングにおける非指示的カウンセリングを主とし、キャリア情報の提供や、助言指導が必要な際は、指示的カウンセリングの要素も取り入れ、カウンセリングを行った』事例で、いわゆる、折衷的カウンセリングによるアプローチを行った事例である。定時制高校に在籍するキャリア発達に課題を抱えていると思われる生徒（Aさん）をキャリア・カウンセリングの事例の対象とした。

2 事例を通しての考察

Aさんの事例を考察するにあたって

定時制高校を卒業した生徒であるAさんの事例である。入学、学校生活、NPO法人教育活動総合サポートセンター（以下、サポートセンター）での活動、アルバイト、就職活動、卒業、就労までの4年間の中で行ったカウンセリングの事例を挙げ、考察を加えたい。なお、入学から3年次まではサポートセンターで行ったカウンセリングの事例、4年次から卒業、就職まではクラス担任が行ったカウンセリングの事例を考察の対象とする。考察をするにあたり、キャリア・カウンセリングを通じて生徒（Aさん）に身に付けさせたい資質・能力として、キャリア教育推進の手引⁴『高校生のキャリア発達は、「現実的探索・施行と社会的移行準備の時期」にあたり、

- ① 自己理解の深化と自己受容
- ② 選択基準としての勤労観・職業観の確立
- ③ 将来設計の立案と社会的移行の準備
- ④ 進路の現実吟味と試行的参加

が高校生のキャリア教育の目標として掲げられている』に基準を求めた。

なお、本事例による考察は、Aさんの高等学校生活およびサポートセンターにおけるカウンセリングの際の観察、面接場面を通しての定性的な把握による考察である。プライバシー保護の観点から原文に若干の変更を加えていることについては、ご了承願いたい。

（1）定時制高校入学当初のAさん

入学後すぐにクラス担任は保護者と面談し、保護者からAさんが緘黙であることが告げられた。保護者からは必要な支援について、「Aさんと話をするときには、穏やかな態度でゆっくり話しかける」「場合によっては筆談での対話を行う」をお願いしたいとの申し出があった。

（2）サポートセンターに通っているAさん（高校3年）がBさんと行ったカウンセリング

事例①

Aさんは定時制高校入学後、週2回サポートセンターに通っていた。サポートセンターでのカウンセリングを例に挙げ、考察を加えたい。定時制高校入学後はアルバイト就労に対して強い関心をもつようになり、自分自身のキャリアについて深く考えるようになった。1学期、面接試験に合格し、アルバイト就労を始めた（その後、卒業するまでいくつかのアルバイトを経験している）。カウンセリン

⁴ 『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き』（2006年 文部科学省）

グは週2回主に学習指導終了後、サポートセンターの支援員であるBさんと1対1で行っていた。高校1年生の当初、「自己表現が苦手のように、質問しても、頷くか首を傾げるか、やっと言葉を発しても小さな声で一言答えるぐらいなので、なかなか会話が成立しない」とのBさんの述懐がある。2年生になると、Bさんから話し始めるのではなく、Aさんから積極的に話を始めるという約束の「おしゃべりタイム」の時間を設けた。3年生になると、AさんはBさんに積極的に自分の悩みを話し始めるようになり、自分自身の将来についても話し始めた。考察の対象としたのは、そのような状況でのカウンセリング場面である。Aさんは当時、コンビニで早朝アルバイトをしていた。

Aさん：アルバイト先で、一緒に仕事をしている人とうまく話ができない。

Bさん：うまく話ができないんだ・・・。

Aさん：雑談が苦手。

Bさん：なるほど、雑談が苦手なんだね。

Aさん：頭の中で考えていること、自分の思っていることを口に出して言えない。

Bさん：そうなんだあ。自分の思っていることを口に出して言えるといいね・・・。

Aさん：だけど、先輩の人が自分のことを大きい声で怒ったときは、ちゃんと店長に、大きい声で怒られるのは嫌だということを伝えた。

Bさん：ちゃんと、伝えられたんだ。偉いね。

Aさん：うん（頷く）。朝早くからアルバイトしてるけど、早起きにはもう慣れた。

Bさん：へえー、すごいね。

将来のこと、考えてる？

Aさん：定時制高校を卒業したら、就職したいと思ってる。家族に負担をかけないためにもね。

Bさん：それで、朝早くからのアルバイト、頑張ってるんだ。長く続いているね。

Aさん：将来は就職して、自立したい。

Bさん：その気持ち、大切にしないとね。Aさんは、笑顔がとっても素敵だよ。

いつも笑顔を忘れないでね。悲しい顔をしないでいいよ。

Aさん：うん（頷く）（笑顔）。

事例①に対する考察

「自己理解の深化と自己受容」に関して、Aさんの変容がうかがえる事例である。Bさんに聞いた話では、Aさんはそれまでアルバイト先の人に限らず、学校の友人関係においても「うまく話ができない」「雑談が苦手」ということを度々訴えていた。このカウンセリング以後、ほとんどそのことを訴えなくなった。自己を受容、肯定し、前向きに社会適応しようとする姿勢が強く見られるようになっている。また、将来の就職を見越してアルバイトを経験し、それを長期間続けていることから自信を付け、「進路の現実吟味と試行的参加」「社会的移行の準備」が整いつつあることが分かる。

「おしゃべりタイム」で数多くのカウンセリングを行い、その積み重ねがあった上での今回のカウンセリングである。継続的なカウンセリングの必要性とともに、時を得た（タイミングのよい）カウンセリングがキャリア・カウンセリングに繋がる事例である。

サポートセンターにおけるカウンセリングの事例であるが、定時制高校においても同様のカウンセリングの取組をすることで、Aさんのような生徒のキャリア発達を促すことは可能であると思われる。

(3) Aさん(高校4年)とクラス担任が行ったカウンセリング

事例②

卒業学年の4年になるとすぐ、クラス担任はAさんとカウンセリングを行った。(事前に卒業後の進路についてのアンケートを取っている)

クラス担任 : 就職希望って、書いてあるけど・・・

Aさん : 事務の仕事がいいかなって、思ってる。
自分を変えたいって思ってる。

クラス担任 : 自分を変えたいって、どういうこと?

Aさん : 今のままじゃ、ダメかなって・・・

クラス担任 : そうなんだあ。
頑張って、自分に合った仕事探さないとな。

Aさん : (無言のまま) 頷く。

クラス担任 : じゃあ、またゆっくり話をしよう。

事例②に対する考察

この事例は、カウンセリングの基本である「悩みや迷いを受け止める」ことをすることなく、希望する進路の確認に終始している。「自分を変えたいって思ってる」という気持ちを受け止め、受容・共感の姿勢でクラス担任が臨んでいれば、自己の可能性や適性についての自覚がより深まったものと思われる。もう少し時間をかけて気持ちに寄り添う必要があっただろう。定時制高校においては、前述の通り、キャリア発達に課題を抱えていると思われる生徒が在籍しているが、カウンセリングを行う際にも上記のことを踏まえ、じっくりと話を聴く姿勢を生徒に示す必要がある。

事例③

就職活動が始まると、就職に対する意欲は旺盛で、とても熱心に全体指導を受け、他の誰よりも早くハローワークの求人票で会社探しを始め、就職企業説明会にも頻繁に足を運んだ。だが、最終的に何の仕事をしていいか、どのような職種を選んでいいかわからない。受験する企業が絞りきれない・・・といった状況に陥っていた。2学期に入り、クラス担任はカウンセリングの必要性を感じて、Aさんとカウンセリングを行った。

クラス担任 : 何の仕事をするか、迷ってるんだって?

Aさん : もともとは、事務を希望してたんだけど・・・

クラス担任 : 事務を希望しているのは知ってるよ。もともとは・・・っていうのは?

Aさん : 自分に合う仕事がよくわからなくなってる。
高卒で事務を募集してる会社少ないし・・・

クラス担任 : Aさんのセールスポイント、この前話したよね。

Aさん : 学校を4年間、皆勤賞(無遅刻、無欠席、無早退)ってことと、アルバイトを頑張ってたってことが自分の一番のセールスポイントかなあ。

クラス担任 : 素晴らしいね。先生は素直に、Aさんは、よくやってきたって思うよ。
成績だっていいしね。

学校生活を振り返って、自分はよくやってきたって思う?

- Aさん : 皆勤賞もそうだけど、アルバイトやってて、忍耐力が付いたと思う。
我慢強く、辛抱強いつていうのが自分の長所かな。
一度始めたことは最後までやり遂げようって気持ちは強くもってる。
人間関係は得意じゃないけど・・・。
- クラス担任 : Aさんの特徴を生かせる仕事って何だろう。
Aさんだからこそできる仕事ってあるんじゃないかな。
- Aさん : 事務もいいけど、工場で、ものづくりの仕事もいいかなって思ってる。
- クラス担任 : ものづくりの仕事かぁ、それはAさんだからこそできる仕事かも知れないね。
- Aさん : うん(頷く)、そうかも知れない。
- クラス担任 : 一緒に、工場でものづくりの仕事をしている会社探してみようか。
Aさんに合った、いい求人があるかも知れないよ。
- Aさん : うん(頷く)(笑顔)。

事例③に対する考察

Aさんは「選択基準としての勤労観・職業観の確立」において迷いが生じていた。そこで、クラス担任はAさんに自分自身のセールスポイントを再確認させ、「自己理解の深化と自己受容」を高めた。その上で、再度職業および職種について考えさせたところ、これまでのアルバイト経験から、工場でのものづくりの仕事が自分に合っているのではないかと考えていたことをクラス担任に打ち明け「進路の現実吟味」を深めることとなった。また、「アルバイトやってて、忍耐力が付いたと思う。我慢強く、辛抱強いつていうのが自分の長所かな」という発言から、アルバイト就労をすることによって「選択基準としての勤労観・職業観の確立」を推進し「進路の現実吟味」を高めたということが分かる。

発言からも分かるように、Aさんは人間関係の構築が得意ではないが、今回のカウンセリングで長所を最大限生かし、前向きに行動することが大切であると気付いたことは、クラス担任との4年間で築いた信頼関係によるところが大きいものと思われる。

Aさんのように自分の将来に対する強い不安感を抱えている生徒が在籍する定時制高校において、キャリア・カウンセリングの基本である「生徒自らの意志と責任で進路を選択することができるようにする」には、傾聴・受容・共感することはもちろんのこと、時を得た(タイミングのよい)キャリア・カウンセリングが必要かつ有効であることが分かる。

このカウンセリング後、Aさんは就職活動という現実が大きく一步を踏み出すこととなり、自身の希望するものづくりの仕事に従事することとなった。

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

本研究から、定時制高校におけるキャリア・カウンセリングの在り方として、生徒一人一人のキャリア発達課題の克服、社会的・職業的自立に向けて、時を得た(タイミングのよい)カウンセリングが必要かつ有効であることが分かった。

入学から卒業まで、継続的なカウンセリングを行うことにより、生徒との信頼関係が深まり、日常的に行っているカウンセリングが話題によっては、キャリア・カウンセリングへと繋がることも示すことができた。

また、キャリア発達に課題を抱える定時制高校の生徒がキャリア・カウンセリングを通じて自己肯定感を高め、自立しようとする姿勢を育む変容過程も明らかにできた。

課題としては、事例研究による定性的な研究であるため、定量的な有効性を示すことができなかつたことが挙げられる。定時制高校に、キャリア発達に課題を抱えていると思われる生徒が在籍する現状から、障害やそれに類することを考慮に入れた上でのキャリア・カウンセリングの必要性（職業リハビリテーションの知見も取り入れて）、特別支援教育の視点からのキャリア・カウンセリングの取組の必要性の研究も課題である。卒業後もライフステージ全体を見据えて継続的にキャリア・カウンセリングを行う取組も課題といえるだろう。今後も研鑽を重ねていきたい。

最後に、事例や実践内容の掲載を快くご許可くださいました関係者の皆様に心より感謝いたしますとともに、研究を進めるに当たり、適切なお指導とご助言をいただいた先生方、勤務校の校長先生をはじめ、学校教職員の皆様、NPO 法人教育活動総合サポートセンターの皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 宮城まり子『キャリアカウンセリング』 駿河台出版社 2002年
- 久原弘 やまぐち総合教育支援センター長期研修教員調査研究
「高等学校におけるキャリア・カウンセリング ー援助方法についての一考察ー」 2005年
- 日本キャリア教育学会編『キャリア・カウンセリングハンドブック』 中部日本教育文化会 2006年
- 田中直子・NPO 法人夢のデザイン塾『先生のためのキャリア・カウンセリング事例集』
学事出版株式会社 2008年
- 一般社団法人臨床発達心理士認定運営機構 日本臨床発達心理士会編
『21の実践から学ぶ臨床発達心理学の実践研究ハンドブック』 金子書房 2010年
- NPO 法人教育活動総合サポートセンター 文部科学省委託
『問題行動への対応におけるNPO等の活用に関する実践研究事業 研究報告』 2010年
- 文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』 2011年

【指導助言者】

- 川崎市総合教育センター指導主事 安藤 勉
元川崎市立田島養護学校長 石原 由美子

【研究協力者】

- NPO 法人教育活動総合サポートセンター 石崎 弘美